

日本の朝鮮植民地支配と3・1運動

長谷川 了一（憲法9条ファンクラブ事務局長）

はじめに

3月1日は、韓国の4大祝日（注）の一つ、「三一節」の日である。「三一節」は、69年前、日本の植民地からの独立をめざして朝鮮民衆がたたかった一大民族運動である「3・1運動」の独立精神を受け継いで、民族の団結を深めるとともに韓国国民の崇高なる自主独立精神を永遠に記念するために設けられた記念日である。今年の三一節では、韓国の李明博新大統領が「歴史の真実からけって目をそらすべきではない。」と挨拶している。本稿では日本がどのように朝鮮を植民地としたか、および朝鮮民衆が独立をめざしてたたかった3・1運動についての歴史の概要を紹介しよう。

「乙巳保護条約」で朝鮮を保護国に

日露戦争を戦っている間に、朝鮮の主権と人権を踏みにじり朝鮮を占領した。そして、1905年9月5日の日露講和条約調印後の同年11月17日、韓国に第二次日韓協約を強要した。この協約は「乙巳保護条約」と呼ばれるように、韓国に統監府を設置し、日本人統監が韓国政府の上に君臨する日本の“保護国”としたものである。日本は「保護条約」のもとで伊藤博文を初代統監とし、事実上の“植民地”とひとしい統監政治をおこなった。

激しく戦われた義兵戦争

この日本の露骨な侵略・支配に対して、朝鮮民衆は義兵戦争と呼ばれる対日戦争を果敢に戦いはじめた。また、1907年、高宗皇帝はハーグで開かれた第2回万国平和会議に、日本の侵略の事実を世界に知らせる目的で3名の特使を派遣した。怒った日本政府は高宗を退位させた。その後、第三次日韓協約を強要し、韓国軍隊を解散させ、警察権・司法権・行政権まで含め、韓国政治の全権を掌握した。

義兵戦争には市民、学生、農民も加わり、1907年から1911年までの五年間に述べ15万4000人の義兵が、日本軍と2907回にわたって頑強に戦った。義兵戦争に対して、日本は大軍を送り込んで弾圧を強めた。1909年10月、韓国統監をやめた伊藤博文がロシアに旅行する途中、満州のハルビンで義兵の一人であった安重根に暗殺された（注）。こうした激しい抵抗に、1909年中には併合を強行すること

ができなかった。だが、日本軍の優勢な火器・焦土戦術などによって義兵の勢力はしだいに後退した。

1910年、朝鮮全土を植民地にした

翌1910年、日本政府は5月に陸軍大将 寺内正毅を新しい韓国統監とし、8月22日、数十隻の軍艦を釜山と仁川の間に置き、大軍をソウルに送り込んで宮廷を包囲し、日韓併合条約に調印させた。その第一条には「韓国全部に関する一切の統治権を完全かつ永久に日本国皇帝に譲与す」と書かれていた。こうして日本は、朝鮮の人々から祖国を奪い、朝鮮全土を植民地とした。

日本政府は植民地化すると同時に、韓国を朝鮮と、ソウルを京城と改称した。朝鮮総督府を設け、陸海軍大将を総督に任命することにした。総督は天皇に直属して、絶対的権力を持っていた。初代朝鮮総督となった寺内正毅は、「韓国併合」の祝宴で“小早川加藤小西が世にあらば今宵の月をいかに見るらむ”と歌を詠んだ。当時の日本の政治家や軍人たちは、朝鮮侵略政策を、豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争の続きとしてみていたのである。

日本の植民地支配の実態

日本の朝鮮植民地支配は、はじめから軍隊と憲兵による圧制であった。朝鮮全土には、憲兵・警察機関が1万6214箇所も置かれ、2万2千人の憲兵と20万人の憲兵補員が監視の目を光らせた。それに加えてさらに、一個師団（22000 - 24000人）の軍隊を置き、朝鮮の独立運動の鎮圧と中国侵略の予備軍の役割を果たしていた。

この軍隊と警察による支配のもとで、朝鮮総督府は、1910年から土地調査事業を始め、東洋拓殖会社を中心に、朝鮮民衆の土地を取り上げた。土地を失った朝鮮人は小作人になり、あるいは故郷を捨てて満州や日本に移住した。朝鮮は日本のための食料供給地とかえられ、1914年には、産米1400万石のうち、140万石を日本に移出させられた。さらに、総督府は朝鮮人の民族教育をおさえ、教育勅語を中心とする日本語による「皇民化」教育を押しつけた。やがて学校では朝鮮語を教えなくなっただけでなく、朝鮮語を使うと罰せられるようになった。日本人教師は武装して教壇に立っていた。他にも、創氏改名、日本軍への徴兵、強制連行・労働、日本軍慰安婦などの由々しい問題が存在している。（これら日本の植民地支配の詳細については後日を期したい）

大きな民族独立運動だった3・1運動

植民地のもとで朝鮮人は、国内外で独立運動団体を組織して、秘密裏に独立運動を準備した。ロシア革命と第一次世界大戦後の民族自決主義は植民地支配下にあった民族に独立の希望を呼び起こした。

朝鮮の独立運動家たちは33人の連名でひそかに独立宣言書を作り、2万枚を印刷し、太極旗(植民地にされる以前の国旗、現在の韓国の国旗でもある)とともに全国の主要都市に配布し、大規模な示威運動を準備した。1919年3月1日、ソウルのパゴダ公園(現在は韓国語のタプコル公園と改称されている)で、“われわれはここにわが朝鮮国が独立国であること、朝鮮人が自主の民であることを宣言する。これを世界万国に告げて人類平等の大義を明らかにし、子孫万代に告げて民族自存の正当な権利を永久に享有させようと思う”と独立宣言を朗読し、参加者はいっせいに「独立万歳」を高唱したあと太極旗を振りながら市街に繰り出した。これに多くの民衆が合流し、たちまち数万人のデモ行進に広がっていった。同時に平壤・義州・元山などの都市でも運動が始まった。これ以後の運動は、人々が集まる定期市の日に行われることが多く、北部・中部から南部へ、都市から農村・山村へと拡大していき、全民族的な運動に発展し、4月上旬に最高潮に達した。

徒手空拳の民衆デモを発砲・虐殺で弾圧

3・1運動に驚愕した総督府は、憲兵・警察に加え正規軍も投入して、徒手空拳の民衆デモに対し容赦なく発砲、射殺するなど徹底した弾圧を行った。これに対する朝鮮民衆の運動の形態も、やがて非暴力のデモ行進から暴力闘争へと激化していった。

3・1運動に対して、日本・総督府は以下のような多くの虐殺・弾圧を行っている。主なものとして堤岩里虐殺事件、江西虐殺事件、砂川虐殺事件、蜜陽虐殺事件、孟山虐殺事件、陝川虐殺事件、定州虐殺事件、南原虐殺事件などがある(注)。また、検挙者に対する虐殺・拷問も多数行われた。「朝鮮のジャンヌ・ダルク」と呼ばれる天安の女子学生指導者柳寛順も、拷問が原因で獄死した。消防隊、在郷軍人会などの在住日本人の団体も朝鮮人弾圧に加担した。この結果、弾圧や虐殺による被害者総数(1919.3.1~5月末)は、死者数7,509人、負傷者数15,961人、逮捕者数46,948人とおびただしい数にのぼっている(朴殷植『朝鮮独立運動の血史』平凡社東洋文庫)。

3ヶ月ほど続いた3・1運動は、結局、日本に武力で弾圧され、朝鮮の独立を回復することはできなかったが、朝鮮民衆は独立の実現に明るい展望を持つようになり、これ以後の民族運動の基盤は大きく拡大していった。

注：三一節のほかの韓国の4大祝日

*制憲節：1948年7月17日、韓国最初の民主憲法が制定公布されたのを記念する日である。

*光復節：光復とは独立を意味している。1945年8月15日、日本から国権を取り戻した日と、1948年8月15日、大韓民国政府が樹立された日を記念する日である。

*開天節：神話による朝鮮の始祖神、檀君が紀元前2333年(戊辰年)旧暦10月3日、檀君朝鮮を建国したことを称える日として制定された。

注：のちに日本に処刑された安重根の遺言

「私は大韓義兵参謀中將であって敵国の首領を処断しただけである。私が死んだら、死体はハルビン公園付近に埋めておき、わが国が独立したら、故国に移してくれ。私は死ぬのではなく、天国に行って大韓独立のために働くのだ」

注：主な虐殺事件

- 1) 堤岩里虐殺事件 1919.4.15 京畿道水原の堤岩里で、有田俊夫陸軍中尉の率いる部隊が運動参加者を教会に閉じこめ放火、29名を虐殺。
- 2) 江西虐殺事件 1919.3.2 平安南道江西で、日本軍憲兵と憲兵補助員3名が、運動の指導者を刺殺したことに憤激した民衆に殺害され、これを日本軍部隊が弾圧、43名射殺、50余名が重軽傷。
- 3) 砂川虐殺事件 1919.3.6 平安南道砂川で、日本軍憲兵が万歳デモの民衆に対して無差別発砲、73名を虐殺。憤激した民衆が憲兵駐在所を全焼させ、憲兵2名を射殺。
- 4) 蜜陽虐殺事件 1919.3月上旬 慶尚南道蜜陽で、1万3000を超える民衆の万歳デモに対して日本軍が無差別射撃、150名以上を虐殺。
- 5) 孟山虐殺事件 1919.3月上旬 平安南道孟山で、日本軍憲兵がキリスト教指導者を逮捕、拷問、釈放を求めたキリスト教徒集団を分遣署所内に入れ、60余名を銃で虐殺。
- 6) 陝川虐殺事件 1919.3月中旬 慶尚南道陝川郡内の各所で行われた万歳デモの群衆に対して、日本の警察が鉄棒や銃剣、拳銃で弾圧、4箇所で約50名が虐殺され、数百名が重傷を負った。
- 7) 定州虐殺事件 1919.3月下旬 平安北道定州で5000名以上の民衆が独立万歳を叫んだデモ行進に日本警察・軍隊は銃撃、120名以上を虐殺。
- 8) 南原虐殺事件 1919.4.3 全羅北道南原で、郡内19面の面長が一斉に面長職を辞職、数万の民衆を動員して独立運動を起こすと、日本軍憲兵は応援隊を呼んで、平和的デモを繰り広げる群衆に向かって発砲、11名殺害、数十名を負傷させた(韓国史事典編纂会・金容権編著『朝鮮韓国近現代史事典』日本評論社)。